

エドマンド・バークのポリティカル・エコノミー

中澤信彦(関西大学)

I

報告者は今年 2 月末に『イギリス保守主義の政治経済学——バークとマルサス——』(ミネルヴァ書房)と題する初めての単著を公刊した。この拙い書物は、18 世紀末から 19 世紀はじめにかけてのイギリスを代表する 2 人の思想家、エドマンド・バーク(Edmund Burke, 1729/30-97)とトマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834)の政治・経済思想を「保守主義の政治経済学」という観点から一体的に考究しようとしている。拙著の目的は、これまで保守主義と呼び習わされてきた思想潮流の中に、両者の政治経済学を歴史的に再構成して位置付け、その作業を通して保守主義という思想潮流それ自体を豊饒化させることにある。

30 歳以上の年齢差にもかかわらず、バークとマルサスは共通してその主著である『フランス革命の省察』(1790)と『人口論』(1798)においてフランス革命への批判的態度を明確に表明しており、そればかりでなく、両者は生涯にわたってアダム・スミスへの好意的な態度を保持し、政治経済学という学問分野を重要視し、その発展に寄与しよう努めていた。拙著は、「保守主義の成立」を、フランス革命の衝撃という観点からのみならず、『国富論』の衝撃(経済思想史上のスミスの導入・継承・変容)という観点からも考究しようとしている。

具体的作業としては、すぐれて政治思想家と目されてきたバークの経済思想を歴史的に再構成し、それをバークの政治思想と有機的に接合しようとした。同時に、すぐれて経済思想家と目されてきたマルサスの政治思想を歴史的に再構成し、それをマルサスの経済思想と有機的に接合しようとした。このような作業を通じて、両者を同一平面上で対話させることを可能にし、経済学と保守主義がその生誕の時空をほぼ同じくしていたことの意味を明確化しようと試みた。

拙著が到達した結論をまとめるならば、以下ようになる。バークとマルサスの思想的保守性は、そのフランス革命批判や階層秩序観に典型的に表現されているけれども、両者の間には無視できない差異も看取される。それは、両者が構想した政治経済学の基本構造上の差異を反映するものであって、そうした差異の根底には慎慮観(慎慮の徳の性質およびその担い手)の差異が横たわっている。バークの保守思想の歴史的特質は、広い意味での同時代人と言ってよいマルサスのそれとの対比によって、しかもスミスの導入・継承・修正のあり様の違いによって、いっそう明確に包括的に把握される。この意味において、「保守主義の成立」問題は「経済学の成立」問題と密接な関係を有していた。経済学と保守主義がその生誕の時空をほぼ同じくしてい

たのは偶然どころではなく、歴史的な必然性を有していた。近代思想としての保守主義は啓蒙思想の一変種(ヴァリエント)であり、その生誕時から政治経済学的な思考を自らの体内に宿していた。バークもマルサスも近代社会としての商業社会(あるいは文明社会)を政治経済学的思考に基づいて擁護し保守しようとしたのだ。

おおよそ以上のような内容を示す拙著は(「まえがき」を兼ねた序章を除くと)全 10 章から構成されており、バークとマルサスの政治経済学観の性格的差異の解明を主題とする第 9 章「慎慮の政治経済学——「エコノミストの時代」と「純潔の徳」——」が中核章にあたる。今回はその第 9 章の内容を報告する。なお、報告時間の制約のため、第 9 章の全体ではなく、バークの政治経済学観を扱った前半部分のみの報告となってしまうことを、あらかじめお断りしておく。

II

議論の出発点として、バークの最晩年(死去の前年)の著作『ある貴族への手紙』(1796)の一節を紹介することにしたい。

私は議事に席を占めた最初の会期に、大ブリテンおよびその帝国の商業的・財政的・国制的・外交的諸利害全体(the whole commercial, financial, constitutional and foreign interests)を分析する必要を感じました。当時、私は多くのことをなしましたし、もし当時の事情が許したならば、はるかにもっと多くのことをなしたでしょう。当時は男盛りの年齢でありながら、私の身体全体はこの仕事で痛めつけられました。もし私がこの時に死んでいたら(事実、私は死期が極めて近いと思いました)、私はこの時すでに、ベッドフォード(Francis Russell, 5th Duke of Bedford, 1765-1802)流の報国の観念をもってしても評価できないほどの高い評価を、私の親族のために獲得していたはずです。・・・私の政界引退を容易にするよう国王陛下に進言した者たちの見なすところでは、私は単なるエコノミストにすぎない(only as an oeconomist)わけですが、閣下[=バークの友人かつパトロンであったフィリッツウィリアム伯爵(William Wentworth Fitzwilliam, 4th Earl of Fitzwilliam, 1748-1833)]もそのようにお考えなのではないでしょうか? しかし、よくよく考えてみるならば、それは大したことなのです。もし私が政治経済学に何の価値も認めていなかったら、それを青年期のごく早い時期から議会活動の最後近くまで、ささやかな研究の対象にし続けることはなかったでしょう。(少なくとも私の知る限りでは)ヨーロッパの他の国々でこの学問が理論家たちの研究対象となったのは、それが私の研究対象となった後のことです。この学問が前世紀に誕生したここイングランドでも、当時は未熟な状態でした。高位の学識のある人々が、私の研究の全てが無駄なのではないと考え、それら不滅の業績(immortal works)の

詳細について、時々意見交換を求めてこられました。これらの研究の一部は、最も早い時期に公にされた私の仕事のいくつかの中に付随的に盛り込まれているでしょう。議会は 28 年以上にわたって、それらの効果を目撃してきたし、それらから多少の利益を得てきたのです。

自分の議員としての一番の貢献はインド問題にあるけれども、もし自分がエコノミストとしてのみ評価されたとしても、引退後に与えられた年金は正当である、というのがここでバークがいちばん言おうとしていることである。彼は自らの長年にわたる「政治経済学」の研究を「不滅の業績」と自画自賛し、「エコノミスト」たることを誇っている。それにもかかわらず、彼は市場の諸法則を主題とした著作を残していない¹。実際、この学問は前世紀(17 世紀)にイングランドで誕生した、と彼自身がはっきりと述べているので、「(市場の諸法則を研究する新しい学問領域としての)政治経済学はアダム・スミス(あるいはサー・ジェームズ・ステュアート)によって生み出された」とする今日の経済学史上の常識をバークの政治経済学観にそのまま投影することはできないはずである。それでは、バークは政治経済学という言葉をもどのような意味で用いていたのだろうか？

III

バークの言葉を文字通りに受け取るならば、政治経済学とは「大ブリテンおよびその帝国の商業的・財政的・国制的・外交的諸利害全体を分析する」学問領域のようである。しかし、彼の言葉をもう少し詳細に検討すれば、その政治経済学の内容をいっそう明確に規定できる。政治経済学の「研究の一部は、最も早い時期に公にされた私の仕事のいくつかの中に付随的に盛り込まれている」と彼自身が述べていることが、大きなヒントになる。「最も早い時期に公にされた私の仕事」とは、おそらく、彼が政界進出後に公刊した最初の本格的著作『「現在の国情」論』(1769)を指すように思われる。この著作は、植民地課税政策のプロパガンディストであるウィリアム・ノックス(William Knox, 1732-1819)の『現在の国情』(1768)の主張——英仏七年戦争後のイギリスの国家財政は危機的な状態にあり、戦勝国イギリスよりも敗戦国フランスのほ

¹ 確かに、穀物市場と労働市場の自由放任を説くメモランダム『穀物不足に関する思索と詳論』(1795)は、大半のバーク研究者たちの間で彼の経済思想の集約的表現と目されている(拙著第2章)。しかし、彼は穀物市場と労働市場における自由放任を主張する際に政治経済学という言葉を用いていない。『穀物不足に関する思索と詳論』には政治経済学という言葉が登場しない。しかも、それは彼の仲間内で私的に回覧されただけで彼の生前に公刊されず、このメモランダム以外に真正面から市場を理論的に考察した著作は見当たらない。以上を考慮すると、彼は政治経済学という言葉をも市場の諸法則を研究する学問領域という意味で用いていなかった、と考えるほうが妥当であろう。具体的な根拠を欠いたままで彼の市場への言及を彼の政治経済学と等号で結ぶことはできない。

うがはるかに暮らし向きが良い——を反駁するために書かれた。バークは、『「現在の国情」論』の約60パーセントを財政問題に費やして、統計を最大限に活用しつつ、ノックスの主張が誤りであることを立証しようとしている。この事実に加えて、バークが多大なエネルギーを投じた「経済改革」(1779-82)の実質的内容が「財政改革」であったことも考慮するなら、彼自身は、政治経済学という言葉で、主として「国家に関する収支(釣り合い)の賢明な管理運営」——今日「財政学」と呼ばれる学問分野——の意味で用いていた、と考えるのが妥当であるだろう²。

財政学を中核とするバークの政治経済学は、彼の^{ブルーデンス} 慎慮³の政治学(拙著第5章)の最も重要な領域を占める。慎慮の徳の有無・多寡こそが、「真の政治経済学」「真のエコノミー」「真のエコノミスト」と「偽の政治経済学」「偽のエコノミー」「偽のエコノミスト」とを隔てる分水嶺となる⁴。バークは真の文明社会と偽の文明社会(拙著第3章)、真の改革と偽の改革(拙著第4章)真の人間の権利と偽の人間の権利(拙著第5章)を峻別していたが、同様の峻別が政治経済学の領域でも行われていた。慎慮の徳を体得した真のエコノミストであることを自負するバークと、革命フランスにおける偽のエコノミストの精神の蔓延(慎慮の徳の欠如)を論難するバークの間には、何の矛盾も存在しない。従って、以下に引用する『フランス革命の省察』の最も有名な一節は、偽のエコノミストに対する告発として、読まれるべきである。

騎士道の時代は過ぎ去りました。詭弁家、エコノミスト、計算機の時代がそれ

² 『「現在の国情」論』には、アメリカ植民地政策(課税・貿易など)に関する数多くの議論が含まれており、それらもバークの政治経済学のカヴァーすべき領域に含まれているように推察される。それらを「財政学」と呼ぶことは、今日の用語法から多少ずれてしまうけれども、財政収支も貿易収支も「国家に関する収支(釣り合い)」であることに変わりないから、バークにとって両者はほとんど無差別であったように思われる。

³ 「慎慮」は「時効(prescription)」と並ぶバーク思想の最重要概念の一つである。彼にとって慎慮は「あらゆる美德の中でも第一の美德」である。慎慮以外に美德のリストの中に数え上げられているものとして、「勤勉、礼節、誠実、規律」などがある。これらの美德を育むことは、「交換的正義」への習慣的な顧慮を育むことであり、成功を収めた商人ならそれらの美德を必ず身につけているはずである、とバークは述べる。しかし、これらの美德だけでは、政治家としての任務を遂行するに十分でない。真の政治家には「澆刺たつ精神、着実で忍耐強い注意力、比較総合する様々の力、機略に富んだ理解力……状況把握能力や用心」³が、すなわち、慎慮の徳が必要とされる。もちろん、それは無原則な日和見と同じでない。複雑きわまりない状況の中に身を置きながら、現存社会に諸徳を維持・涵養するべく、正しい目的と適切な手段をともに考慮するような、実践知ないし実践的能力のことである。実際、政治家が慎慮の徳を欠いているような国では社会はアナーキーに陥ってしまう——革命後のフランスの混乱がそれを例証している——から、「勤勉、礼節、誠実、規律」などの下級の諸徳は、発揮の前提条件を失ってしまうことになる。慎慮があらゆる美德の中でも第一の美德とみなされるゆえんである。

⁴ バークは、本来「家産の賢明な管理運営」を意味する「エコノミー」の語を、しばしば「ポリティカル・エコノミー(政治経済学)」と同義で用いており、おそらくその関係で、国家に関する収支(釣り合い)の管理運営者をしばしば単に「エコノミスト」と呼んでいる。

に続きます。ヨーロッパの栄光は永遠に消え失せました。身分と女性に対するあの寛大な忠誠、あの誇り高い服従、あの威厳のある従順、奴隷身分にあつてすら昂然たる自由の精神を保持させたあの恭順は、もはや決して見られないでしょう。金銭に換えがたい人生の優美さ、諸国民の安価な防衛、男らしい感情と英雄的な行動の揺籃も過ぎ去りました。…貴方がたの革命の成就した日、ヨーロッパは、全体として見れば疑いもなく繁栄状態にありました。その繁栄状態のうちどれだけが我々の古い習俗(作法)と思想の精神に負っていたのか、簡単には申せません。…我々の習俗、我々の文明、そして文明や習俗と結びついた全ての価値ある事どもは、我がこのヨーロッパ世界においては、幾世紀にもわたり 2 つの原則の上に立脚して来ました。いやその 2 つが結合した結果でもありました。これにも勝って確実なことはありません。私が申しているのは紳士の精神と宗教の精神です。

ここでの「エコノミスト」が公収入の管理者(財政家)を意味することは、すぐ後に「諸国民の安価な防衛」という言葉が登場することからも容易に理解できる。フランスの政治家たちが、真のエコノミストとしての資質(慎慮)を備えていたならば、今日の「ヨーロッパの栄光」の源である「我々の古い習俗と思想」「紳士の精神と宗教の精神」を保存しながら、公収入の改革も実行できたはずである。しかし、彼らは、前者を根こそぎ破壊したあげくの果てに、国家を破産へと追いやった。彼らは偽のエコノミストなのだ。

それでは、以上のようなバークの政治経済学観・エコノミー観・エコノミスト観と、彼のレッセ・フェールの経済思想との関係は、どのように統一的に把握されるのだろうか？

IV

バークの政治経済学の究極の目的は、慎慮の徳に基づいて国家に関する収支の賢明な管理を行い、統治から腐敗(恣意的な権力)を取り除くことによって、公共の利益(公共善)を達成することにある。政治学と政治経済学の関係からしても、経済(財政)改革による「真のエコノミー」の実現は、公共の利益(公共善)達成という政治学の大目的に対して「二次的・従属的・道具的」な小目的にすぎない。それと同様に、レッセ・フェールという一般的通則も、腐敗の除去というより高次の目的を達成するための一つの指針にすぎない。彼の政治経済学が市場の諸法則に関する原理的な考察をその領域内にまったく含まないわけではないけれども、それらは大ブリテンとその帝国の諸利害をめぐる政策との関連において考察されるにすぎず、政治経済学という領域のかなり外側(周縁)に位置するように思われる。従って、「商業の法則は、自然[の]法[則]であり、したがって神の法なのである」という『穀物不足に関する思索と詳

論』の有名な一節も、彼がレッセ・フェールの絶対性を一面的に唱道したものとして受け取られるべきでない。慎慮に基づいて、つまり、便宜や裁量に基づいて、そうした一般的通則には例外や修正が認められうるのだ。

このように考えると、バークの経済政策観は、ハイエクおよびフリードマン流のルール主義よりもケインズ流の裁量主義にむしろ近い、と理解されるべきであろう。ハイエクは、自らが擁護に努める「自生的秩序」「真の個人主義」の哲学者としてバークをしばしば賞賛しているが、その理解には過度の単純化が見られる。ハイエクはケインズ流の裁量主義を「理性の濫用」として厳しく批判するが、バークの慎慮の政治経済学は、裁量主義と「理性の濫用」を単純に等号で結ぶことを許さない。教条主義的なレッセ・フェールや機械的な財政削減の主張に対しては、慎慮に基づく例外や修正が認められうるるのであって、このような基本的性格を有するバークの政治経済学は、公共の利益（公共善）という大目的を達成するための手段についての深い洞察を彼の政治学に提供しているという意味においても、彼の慎慮の政治学の最も重要な領域を占めているのである。

V

マルサスの慎慮観および政治経済学観と対比させつつ、これまでの議論をまとめたい。バークにとって慎慮は、中流身分が上流身分へと上昇転化していくために必要な、すぐれて政治的な徳であったのに対して、マルサスにとって慎慮は、下層階級が中層階級へ上昇転化していくために必要な、すぐれて経済的・社会的な徳であった。バークの政治経済学においては、慎慮の徳を体得したエコノミスト（財政家）による政治的腐敗（恣意的権力）の除去が重視されているのに対して、マルサスの政治経済学においては、貧民の境遇を改善するために、彼らに慎慮の徳を涵養し、早期の結婚を思いとどまらせるような政策（特に教育政策）が重視されている。バークにとって政治経済学という学問領域は、その中核部分に「国家に関する収支（釣り合い）の賢明な管理運営」の学としての財政学が据えられ、それを大ブリテンとその帝国の諸利害をめぐる政策の分析が取り囲む、という基本構造を呈している。それに対して、マルサスにとって政治経済学という学問領域は、その中核部分に人口原理によって影響を受ける実質賃金（労働市場）の理論的分析と、そのような市場分析に基づく貧民の境遇改善のための政策論（政策の限界も含む）が据えられ、それを関連する理論的・政策的分析が取り囲む、という基本構造を呈している。このようにして、はっきりと異なる 2 つのタイプの「イギリス保守主義の政治経済学」が、我々の眼前に立ち現われている。

※参考文献については、お手数ですが、拙著をご参照ください。